

第11回久留島武彦顕彰 全国語りべ大会 【講評】

【審査員】 後藤 惣一

| 部 別 | 講 評 |
|-------|---|
| 一般の部 | <p>本来語り部として昔噺などを語る場合は、物語の内容が見えること、はっきりイメージできる声、発音やリズム、速さと間、視線の動き、身ぶり・表情も語りのうちであることを忘れてはならない。今回はテープ審査だけに、語る人の表情やしぐさは話の内容から、声のありようから察する以外ない、そのような状況の中で今回の語りは、すべて音声ということでの判定です。</p> <p>しかし、音声だけにどの作品も、とりわけ上位入賞者の作品は、細かな問題点はあるにせよ、すばらしい語りでした。語りを効果的ならしめる要素には顔や表情、声の出しようなど、加えて、しぐさ・ポーズなどありますが、今回の音声だけで見ると、言葉の調子、リズム高低、間など喜怒哀楽に応じて入賞者はもちろん、それ以外の人も大なり小なり上手にこなしていました。</p> <p>入賞者(3名)を例にすれば、開口時の表現、擬音語・擬態語(オノマトペ)の使い方、感情の起伏(喜怒哀楽)など、巧みに活用されていました。上位入賞者に目立って感じとられ、他の話者も大なり小なり多くその片りんを見ることができ、有意義な「語りべ大会」の審査会でした。</p> |
| 小学生の部 | <p>子どもらしい話材の選択がなされており、大人に負けぬ話しぶりに感動しました。ともすると、子どもの場合ひとりごとのように話す傾向がありますが、今回は「相手に語る」心構えで、大人にも負けないような努力の姿が感じられました。</p> <p>ともすると感情の起伏(物語の)がやや平板になりやすいのですが、それを克服した努力のあとが感じられ物語の世界が現実を帯びて伝わってきました。大人にも負けないような、ストーリーの背景にある感情の起伏をみごとに表現している部分も多々あり、将来が楽しみでした。</p> <p>物語をしっかりと読みこんで、自らのものにしてしまうことによって、物語の世界が現実味を帯び、それが表現となって現れてきます。そういった頼もしい語り手が多くいました。</p> <p>今回の発表では、そういううまさを感じさせる人が入賞者以外にも多々いたことは将来が楽しみです。</p> |